様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０２８７２

研究課題名（和文）ガムラン音楽文化の視聴覚教材開発－身体技法の伝承と創作の学習を中心に

研究課題名（英文）The development of audiovisual teaching materials of gamelan music culture: focus on transmission of habitus and learning of creative activity

研究代表者
川口　明子（Kawaguchi, Akiko）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：５０４６６５１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インドネシアのガムラン音楽文化の体験学習を可能とする視聴覚教材（DVD）の開発を目指したものである。具体的には、①ガムラン楽器と音楽文化の紹介、②口頭伝承によるガムラン音楽の身体技法の学習、③代用楽器による合奏とガムランの音楽構造を応用した「創作」を、教材化の３本柱とし、解説書付のDVD教材「ガムラン音楽文化の魅力：きいて・みて・まねして・つくって・楽しもう」を作成した。作成過程で、教員養成における本教材の活用を試行した結果、「表現」と「鑑賞」をリンクさせたガムラン音楽文化の体験学習の有効性が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果により、次のような学術的・社会的意義が認められた。①「表現」と「鑑賞」をリンクさせたこれまでにないガムラン音楽文化の教材作成、②伝統音楽における口頭伝承と体験学習への応用、③代用楽器の活用と「創作」教材の開発、④メディア(視聴覚教材）による学習法の開発：口頭伝承の音楽におけるDVD教材の役割とその可能性の拡大、⑤世界音楽world musicsの教育とガムラン音楽文化の学習とのリンク、⑥身体技法の伝承による無形文化遺産の継承、⑦伝統と現代：古典から新作・創作を生み出す。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to develop audiovisual teaching materials (DVD) to enable practical learning of Indonesian gamelan music culture. Three pillars were considered for the teaching materials, specifically 1) introduction to gamelan instruments and music culture, 2) learning of gamelan music and its habitus through transmission in terms of orality, and 3) gamelan ensemble with substitute instruments and creative activity through the applied musical structure of gamelan, to develop "The attraction of gamelan music culture: listen, see, mimic, create, and enjoy", DVD materials with commentary.
The study showed that applying this material for educational training, which links “musical performance” and “appreciation” together, was effective for the practical learning of gamelan music culture.

研究分野：音楽教育　民族音楽学

キーワード：ガムラン　音楽文化　視聴覚教材　身体技法　口頭伝承　創作　インドネシア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
(1)　情報や人が行き交う「文化の越境」が日常化した今、移民や人種問題を抱える欧米各国を中心に「多文化音楽教育」や「世界音楽の教育」が推進されてきた。この潮流は日本やアジアにも広がりつつあるが、数あるアジアの伝統音楽の中で最も広く普及したのが、インドネシアのガムランである。ガムランは、ゴング類や鍵盤打楽器類を中心とする合奏音楽で、ドレミとは異なる独特の音律や音色、多層なリズムが絡み合う緻密な音楽構造を持ち、ドビュッシー等の作曲家にも多大な影響を与えてきた。主な地域様式にジャワ（ジャワ島中部）、スンダ（ジャワ島西部）、バリ（バリ島）の３つがある。高度な音楽構造を持ちながら、打楽器ゆえに親しみ易いガムランは、異文化理解に最適の体験教材として普及した。今日、ガムランは世界各地の大学等に導入され、世界中のガムラン研究者や演奏団体のネットワーク「アメリカ・ガムラン協会 American Gamelan Institute」も活発に活動を行っている。また、インドネシアでも欧米・日本等でも、ガムランの新作が数多く生まれており、今やガムランはグローカルな音楽文化としての新展開を繰り広げつつある。

(2) 平成 29 年告示の音楽科学習指導要領においても、文化の多様性を理解し協働できる資質・能力が提唱され、「我が国や郷土の伝統音楽」や「世界の諸外国の音楽」の指導の充実が一層求められている。中でも、ガムランは特有の音楽的魅力ゆえに、小中高の音楽科教科書に既に広く掲載されている。しかし実際には、西洋音楽中心の教育を受けてきた多くの教師にとって、その教材化の壁は厚く、教育現場での実践がなかなか進まないのが現状である。

(3) 筆者は、これまでにガムラン音楽文化を事例に「音楽・舞踊・楽器のリンクによる教員養成のためのプログラム」を開発し、「音楽文化を身体で学び教える学習」の実践を進めてきた（科研 20830006、15K04398 等 ）。しかし、このプログラムを受講した学生や教師でも、学校現場で自ら授業を進めるには、さらに「初心者でも身体で学んで音楽構造を理解できるガムランの映像教材」を必要としている。耳からの CD 音源だけでは身体での模倣は困難であり、YouTube や鑑賞教材等の既存の動画を活用しようとしても、学習プロセスが見えないプロの演奏例では音楽の仕組みが解りにくい。また、本物の楽器が無い学校現場では、代用楽器で演奏できるガムラン合奏の教材化や、「創作」へと発展させる学習法も探求すべき課題と言える。
そこで、課題解決のため、口頭伝承の研究に有効な M.モースの身体技法（ハビトゥス）の論を音楽科教育に援用しながら、ガムランの体験学習を可能にする DVD 教材の開発を行うこととした。

２．研究の目的
本研究は、ガムラン音楽文化を事例に、「表現」と「鑑賞」をリンクさせた体験学習を可能にする DVD 教材を開発することを目的とする。具体的には、①ガムラン楽器と音楽文化の紹介、②口頭伝承によるガムラン音楽の身体技法の学習、③代用楽器による合奏とガムランの音楽構造を応用した「創作」を教材化の３本柱とし、作成した教材の有効性（学校、教員養成、教員研修等での活用）を検証する。

３．研究の方法
(1)　ガムランの地域様式の中でも、バリ島のガムランやケチャについては、既に授業事例の DVD 等も出版されている（山口・加藤・川口 1998）が、ジャワ島のジャワ様式（ジャワ島中部）とスンダ様式（ジャワ島西部）のガムランの事例はまだ少ないため、本研究の対象とした。

(2)　研究の方法は以下のとおりである。
①文献・視聴覚資料等の収集・分析と、ガムラン音楽文化の現状調査
②ジャワ、バリ、スンダの３地域様式のガムランの DVD 教材の開発とドキュメンテーション：１）ガムラン合奏（本物の楽器）の体験学習、２）代用楽器による「木琴ガムラン」、３）ガムランの音楽構造を応用した「創作」の開発と試行・検証
③視聴覚教材「ガムラン音楽文化の魅力－きいて・みて・まねして・つくって・楽しもう」（DVD＆解説書付）の作成

４．研究成果
(1)　「表現」と「鑑賞」をリンクさせたこれまでにないガムラン音楽文化の教材作成：本教材は、DVD と解説書から成り、１ジャワ・ガムラン、２バリ・ガムラン、３スンダ・ガムラン、４竹の音楽文化１：アンクルンとインドネシア民謡、５竹の音楽文化２：スンダのチャルンとわらべ歌、６インドネシアの舞踊を体験しよう、７ガムラン風音楽づくり１：インターロッキングで遊ぼう、８ガムラン風音楽づくり２、９実践例１小学校：インドネシアの音楽に親しもう～ガムラン体験を中心に、10 実践例２中学校：総合学習でガムラン音楽文化を学ぶ、11 ガムランとド

ビュッシーという内容で構成されている。

(2)　伝統音楽における口頭伝承と体験学習への応用：太鼓の「テレツク天」のような「唱歌しょうが」（口唱歌）による伝承法は、ガムランなどの世界の伝統音楽に広く見られる。新指導要領でも、新たに和楽器の学習に「適宜、口唱歌を用いること」が明示された。既に「我が国の伝統音楽」については口唱歌を用いた DVD 教材も開発されつつあるが（徳丸 2019)、「世界の諸外国の音楽」では、口唱歌のような口頭伝承を重視した教材の開発は遅れている。それゆえ本研究で、ガムランを事例にアジアの伝統音楽の身体技法の伝承に基づく体験学習の指導法を新たに提示し開発したことは、今後の音楽教育への大きな寄与と成り得る。

(3)　代用楽器の活用と「創作」教材の開発：「世界の諸外国の音楽」の教材化は「鑑賞」から「表現」への展開もわずかに見られるが、その映像教材化は不十分である。バリ・ガムランで「器楽」教材として代用楽器の合奏の採譜例が教科書に掲載されたが、楽譜だけでは演奏まで学習が進みにくい。また、「創作」教材として、ガムランのインターロッキング（入れ子リズム）の仕組みを用いた「音楽づくり」の例もあるが、図形楽譜のみで視聴覚教材化には至っていない。本研究で、日本や西洋音楽とは異なる音楽文法を用いた「創作」活動の可能性が開け、具体的な実践へつながると期待される。

(4)　メディア（視聴覚教材）による学習法の開発と口頭伝承の音楽における DVD 教材の可能性の拡大：ICT の普及と共に、現在インドネシアでもガムランの授業で、携帯電話による録音や録画が日常的に行われ、学習方法が変化してきている。本研究では、口頭伝承による伝統音楽を演奏する学習のために、DVD 教材を使う可能性と限界について、メディアと身体性の観点から検証することができた。これは、音楽科教育における ICT 活用の可能性を開く新しい視点と言える。

(5)　世界音楽 world musics の教育とガムランの学習とのリンク：ダイバーシティが標榜される現在、欧米を中心に多文化音楽教育やインターカルチュラルな音楽教育が展開されている。その中で P.S.キャンベルによる「世界音楽教授法 World Music Pedagogy」は、世界の様々な音楽の音源を教材に、「聴く」「創る」「統合する」活動を柱に授業プランを数多く提示し、注目されている。しかし、異文化の音楽を西洋音楽の五線譜やドレミ唱法に翻訳して教材化する方法に対しては、課題も指摘されている（金光真理子 2016)。本研究では、そうした課題を乗り越えるべく、ドレミや五線譜を介在させずに DVD 教材を手本として活用することで、本来の音律や口頭伝承に則った学習法を開発した。

(6)　身体技法の伝承による無形文化遺産の継承：民族音楽学や民俗学等では、楽譜に頼らない身体技法による伝承の重要性についての研究が進み、「わざ」も研究テーマの重要トピックとなってきた（生田久美子 1987、川口 2009 など)。AI の技術革新が進む中で、「人間にしかできないこと」として、こうした「わざ」を駆使した伝承が挙げられる。その意味で、口頭伝承による身体技法の学習を視聴覚教材化することは、音楽科教育を通して世界の無形文化遺産の継承にもつながる方法を開発する研究と位置づけることができる。

(7)　伝統と現代－古典から新作・創作を生み出す：現在ではインドネシアにおいても、ガムランの古典曲だけでなく、多くの新作が作られており、ガムラン楽器を取り入れたポピュラー音楽も盛んになっている。さらに米国のルー・ハリソンや日本の藤枝守をはじめとし、欧米や日本の作曲家によるガムランの新作も数多く発表され、高い評価を得ている（川口 2002)。その意味で、今やガムランの「創作」教材化は、世界の音楽文化に新しい伝統を生み出すグローカルな挑戦とも位置づけられる。

＜引用文献＞

① 生田　久美子、「わざ」から知る、東京大学出版会、1987
② 金光　真理子、P.キャンベルの世界音楽教授法－その利点と課題、横浜国立大学人間科学部紀要Ⅰ、人間科学、18、2016、1-19
③ 川口　明子、越境するガムラン－日本のガムランを中心に、お茶の水音楽論集、第 4 号、2002、1-21
④ 川口　明子、口頭性と身体性－スンダ（西ジャワ）の伝統音楽の学習を事例として、音楽教育実践ジャーナル、第６巻第 2 号、2009、28-38
⑤ 徳丸吉彦監修、日本音楽の教育と研究をつなぐ会編著、唱歌で学ぶ日本音楽（DVD 付き)、音楽之友社、2019
⑥ 山口修、加藤富美子、川口明子監修、アジアの音楽と文化（LD６枚組＋解説書)、ビクターエンタテイメント／平凡社出版販売、(DVD 版 2004)、1998

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大田　美郁	４．巻 52
２．論文標題 自然の音を生かした音楽表現：音色に着目して	５．発行年 2022年
３．雑誌名 小田原短期大学研究紀要	６．最初と最後の頁 153-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大田美郁　本多佐保美	４．巻 18
２．論文標題 アジア地域の音楽を教材とする中学校音楽科プランの提案ー小泉文夫の音楽教育論を土台とした授業実践開発	５．発行年 2020年
３．雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	６．最初と最後の頁 84-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川口明子　黒川真理恵	４．巻 18
２．論文標題 図書紹介　日本音楽の教育と研究をつなぐ会編著　徳丸吉彦監修　［音楽指導ブック］唱歌で学ぶ日本音楽（DVD付き）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	６．最初と最後の頁 120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川口明子	４．巻 5
２．論文標題 岩手の民俗芸能と復興教育	５．発行年 2023年
３．雑誌名 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学開発センター　NEWS LETTER	６．最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 川口明子
2．発表標題 心に音楽の喜びを：主体的な学びを育む学習指導法の改善　ガムランを学ぶ
3．学会等名 岩手県雫石町教育研究会音楽部会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 大場陽子
2．発表標題 虫と音楽：啓蟄の日を迎えて
3．学会等名 岩手大学アートフォーラム
4．発表年 2022年

1．発表者名 風間純子
2．発表標題 「私たち」の音楽をつくる：アジアの民族音楽からの発想
3．学会等名 日本音楽療法学会
4．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大田　美郁 (Ota Mika)	小田原短期大学・保育学科・専任講師	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大場　陽子 (Oba Yoko)	岩手大学・教育学部・准教授	
研究協力者	風間　純子 (Kazama Junko)	ホリスティック音楽療法の会・副代表	
研究協力者	藤井　亜紀 (Fujii Aki)	岩手大学・教育学部・准教授	
研究協力者	村上　圭子 (Murakami Keiko)	ＮＰＯ法人日本ガムラン音楽振興会・代表	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関